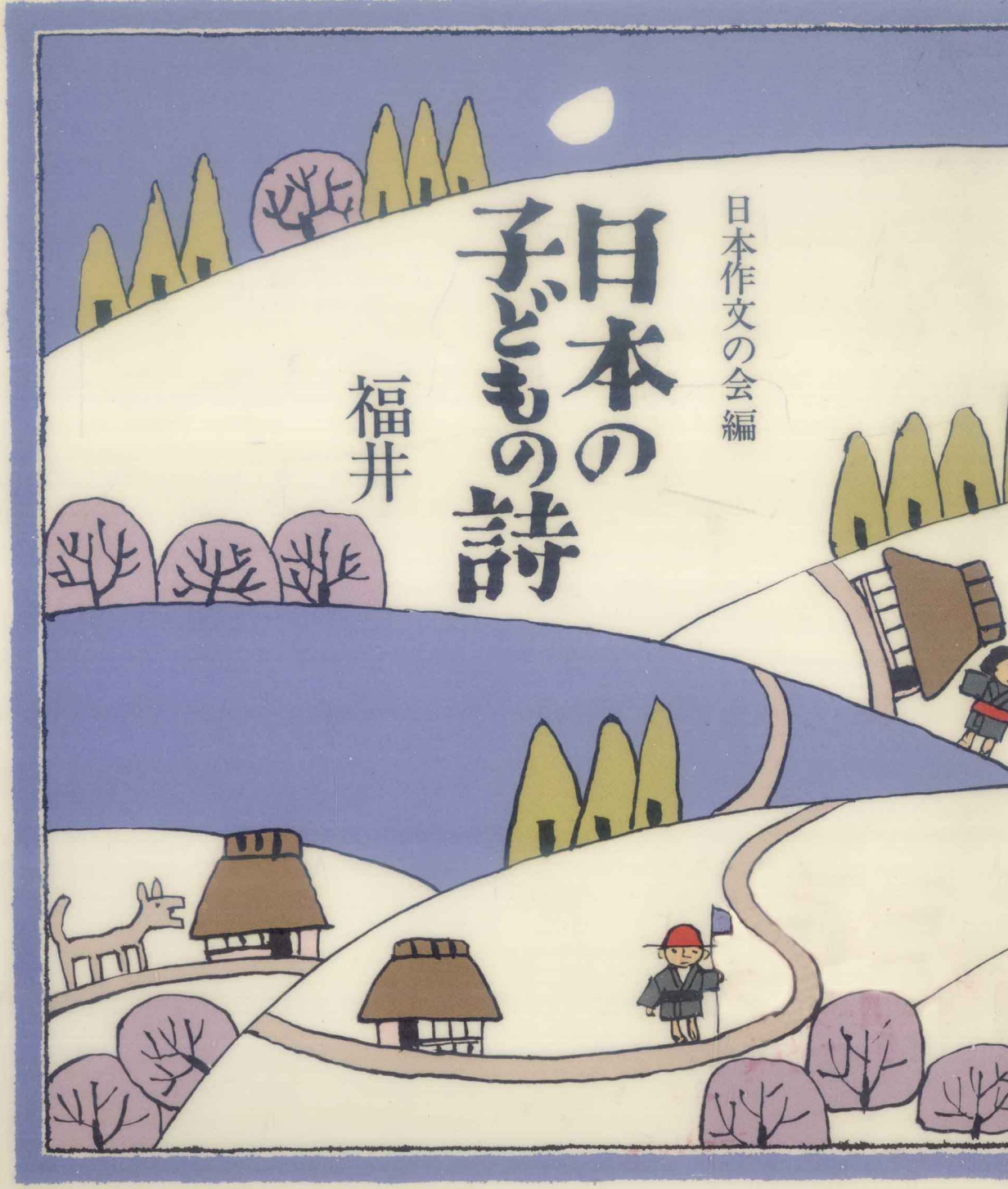

日本の子どもの詩

福井

日本作文の会編

日本の子どもの詩

千葉

日本作文の会 編

岩崎書店

日本の子どもの詩 12 千葉

一九八一年三月二〇日 初版発行

編　者　日本作文の会
発行者　森山甲雄
印刷所　株式会社 K・M・S
　　株式会社 金羊社
製本所　小高製本工業株式会社

発行所　岩崎書店
東京都文京区水道一―九―二
電話(〇三)八一二―九一三一(代)

©1981 Nippon, Sakubun no kai 〔分〕8392 〔製〕108012 〔出〕0360

序文

(V)

マルクス＝エンゲルス全集の第八巻は、一八五一年八月から一八五三年三月までに書かれた著作をおさめている。

ヨーロッパで極反動が始まったという条件のもとにあって、マルクスとエンゲルスは、一八四八―一八四九年の革命的戦闘の経験をさらに理論的に概括し、革命的プロレタリアートの勢力を維持し蓄積し、プロレタリア党の幹部を理論的に養成することが、自分たちの主要な任務だと考えた。この時期には、マルクスとエンゲルスは、その戦友たちを説いて、知識を習得するための骨のおれる、ねばり強い活動にむかわせ、革命的民主主義運動とプロレタリア運動の新しい高揚が開始するとき、彼らが十分の用意をもってこれを迎えることのできるように、準備をととのえさせた。

マルクスとエンゲルスは、自分たちの革命的理論をいっそう発展させることに大きな意義を認めた。いまや経済学がマルクスの科学的研究の主要な対象となった。一八四八年以前には、科学的共産主義を哲学的に基礎づけることがマルクスの注意の焦点におかれ、また一八四八―一八四九年には、政治思想の発展がそうした地位を占めたが、五〇年代から六〇年代にかけては、経済学説が前面に押しだされてきた。マルクスは、すでに四〇年代に始めたブルジョア経済学の批判的研究を一八五〇年末に再開したときには、この仕事をじきに完成できるだろうと考えていた。だが、このときには彼はこの計画を実現することができなかった。その原因は、マルクスの亡命生活の苦しい条件にあっただけではなく、また彼が出版者を見つけることができなかったためだけではなかった。それはまた、非常な科学的良心がマルクスをうながして、つぎつぎに新しい資料や文献の批判的研究にしたがわせ、つぎつぎに生活のもたらした新しい事実や材料の処理にあたらせたからでもあった。マルクスの準備ノートは、彼が、本来の意味の経済科学のほかに、技術史や文化史について、また数学や、農化学や、その他経済学の研究に関連して彼の関心をひいたさまざまな科学について、膨大な文献を研究したことを立証している。

(VI)

マルクスは、科学のあらゆる分野でなされた進歩の一歩一歩を跡づけ、人類思想のあらゆる新しい成果を批判的に摂取したのであった。

この当時、エンゲルスの理論的研究の主要な対象は、軍事科学と兵術の歴史であった。すでに一八四八―一八四九

年に、エンゲルスは、革命闘争の必要にせまられて、軍事問題、まず第一に武装蜂起の問題の研究にたずさわっていた。一八五〇年一一月にマンチェスターに移住してから、エンゲルスは軍事の系統的な、根本的な研究にとりかかった。この研究の最初の成果は、『一八五二年における革命的フランスにたいする神聖同盟の戦争の条件と見通し』（本全集、第七巻、四六八―四九三ページを参照）という手稿と、本書所載の論文『イギリス論』とであった。エンゲルスは、つづいて、一八四八―一八四九年の諸戦争、とりわけハンガリーの革命戦争を論じた著作を書くつもりであった。エンゲルスが軍事の研究にむかった主要な動機は、将来の革命的諸事件において武装闘争の問題がかならずや巨大な役割を演じることを、彼が深く理解していたことにあった。

軍事科学の分野における仕事と並行して、エンゲルスは、マンチェスターでさまざまな言語を研究し、言語学の問題にたずさわった。エンゲルスは、ヨーロッパの多くの言語を完全に習得していたが、一八五〇年一二月には、ロシア語その他のスラヴ系諸言語の研究にとりかかった。彼は、言語を、その国民の歴史、文化、文学と関連させて研究した。エンゲルスが言語の研究にしたがったのは、科学的興味のためだけではなく、マルクスとエンゲルスがそれまで果たしてきたし、将来も果たすはずの実践的な国際的革命的活動の必要にもとづくものであった。

マルクスとエンゲルスは、その理論的研究を、プロレタリア党を組織し、党の幹部を科学的共産主義の精神で教育することを目的とした党＝政治活動と結びつけた。すでに一八五〇年九月に共産主義者同盟の分裂をもたらしたヴィリヒ＝シャッパーのセクト的分派にたいするマルクスとエンゲルスおよびその支持者たちの闘争は、この時期に非常に鋭いものとなった。労働運動と民主主義運動内のセクト的分子に反撃をくわえながら、また、さまざまな亡命者グループ(VII)のたくらみ、陰謀や蜂起を組織しようという彼らの冒険主義的計画を暴露しながら、マルクスとエンゲルスは、プロレタリア党の思想的原則を擁護し、開始した反動期の条件のもとでのプロレタリア党の戦術を基礎づけた。

この当時マルクスとエンゲルスの見解を出版物で擁護するには、さまざまな困難がともなったにもかかわらず、二人はその政論家としての活動を中断しなかった。二人は、幾年にもわたって、チャーティストの機関紙『ノーツ・トゥー・ザ・ピープル』および『ザ・ピープルズ・ペーパー』の紙上で、もっとも重要な政治的諸問題にたいするプロレタリア的見地を擁護し、その時代の主要な諸事件に反応した。一八五一年秋から、当時進歩的であったアメリカ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の新聞『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』へのマルクスの規則的な寄稿が始まり、一〇年以上もつづいた。この新聞への寄稿によって、マルクスは、労働者新聞雑誌がほとんど全然存在していなかった当時にあって、その戦闘的な政論活動をつづけ、たとえ間接的ではあっても、プロレタリア党の利益のために世論にはたらきかけることができた。『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』のための仕事がマルクスの全時間を吸収して、マルクスとエンゲルスが第一義的な意義を与えていた経済学の分野の研究からマルクスを引き離すおそれがあったので、同紙のための論文や通信の多くは、マルクスの依頼によってエンゲルスが執筆した。この巻の巻頭におさめた連続論説『ドイツにおける革命と反革命』も、その一つである。

『ドイツにおける革命と反革命』のなかでは、エンゲルスは、史的唯物論の立場から、一八四八―一八四九年のドイツ革命の前提、性格、推進力を解明している。エンゲルスのこの論文は、革命そのもののさいちゅうにマルクス主義の創始者たちが『新ライン新聞』の論壇からおこなった活動の総括を与えている。革命の教訓の分析にもとづいて、エンゲルスは、革命的な方法でドイツを統一し、ドイツの社会・政治制度を徹底的に民主的に改造することを目標としたプロレタリア党の政綱が正しかったことを証明している。この論説のなかで、エンゲルスは、ドイツ革命がおこなわれた国内的・国際的情勢のあざやかな概観を与えている。彼は、当時のドイツの社会経済的諸条件を研究して、それが運動の経過におよぼした影響を示し、革命のもっとも重要な諸段階と、この革命でさまざまな階級が演じた役割とを特徴づけ、革命の敗北の原因を明らかにしている。

(VIII) エンゲルスのこの著作は、歴史的諸事件の錯雑した複合体をマルクス主義的に研究したすぐれた手本である。

この著作では、史的唯物論のきわめて重要な諸命題がさらに発展させられ、具体化されている。一八四八―一八四九年のドイツの実例によって、エンゲルスは、社会の経済的土台が歴史上にもっている規定的な意義を示し、政治史と社会思想の歴史を理解するためには経済的土台を分析する必要があることを明らかにしている。彼は、敵対的社会の発展において階級闘争の果たす役割を示し、また、寿命の過ぎた社会・政治制度によってその充足を妨げられている諸国民の切実な必要や欲求の表現としての革命の合法則性を明らかにしている。革命は「歴史の機関車」だというマルクスの深遠な思想をつづけて、エンゲルスは、革命を、「一国民が、普通の状況のもとでは一世紀かかっても歩みきれない距離を、五年間で歩む」ことを可能にする「社会的および政治的進歩の強力な動因」(本書、三六ページを

参照）と特徴づけている。

豊富な歴史的資料にもとづいてドイツ革命の推進力を分析しながら、エンゲルスは、『新ライン新聞』紙上の彼自身とマルクスの諸論文に一貫して見られる思想、すなわち、ドイツの自由主義的ブルジョアジーは、ブルジョア革命において指導的な役割を果たす能力をもたず、反革命的な立場に転落してしまい、封建制度との闘争での自分の必要欠くべからざる同盟者である農民の利益を裏切った、という思想を展開している。この結論は、ドイツだけでなく、その他多くの国のその後の歴史にとってきわめて重要である。そこで、ヴェ・イ・レーニンは、ロシアにおける一九〇五―一九〇七年の革命の性格と推進力を分析して、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーという、彼自身の提起した思想を擁護したさい、しばしばマルクスとエンゲルスのこの結論に注意をうながしたのである。

エンゲルスのこの著作では、小ブルジョア民主主義派の指導者の役割が詳細に特徴づけられている。これらの指導者は、革命の危局にさいしてつねに政治的な短見と、臆病と、不決断を暴露し、それによって革命の敗北を助けたのであった。エンゲルスは、小ブルジョア的指導者の「議会的クレティン病」を、彼らが議会制諸機関の全能を信じて、

(IX) 憲法の枠を出ようとせず、人民に呼びかけて武装した大衆の支持にうったえるのを恐れていたことを、痛烈に非難している。革命のもっとも首尾一貫した真の戦闘的勢力は労働者階級であって、労働者階級は、「全体としての国民の、真の正しく理解された利益を代表した」（本書、九九ページを参照）ことを、エンゲルスは示している。

エンゲルスが、この著作でおこなった革命的闘争の戦術の概括は、きわめて重要な意義をもっている。革命的階級とその党にたいして、エンゲルスは決断、大胆さ、自己犠牲心、精力的な攻勢行動をおこなう能力を要求している。彼は次のように書いている。「革命にあっては、戦争におけると同様に、大胆に敵と対決することがつねに必要であって、攻撃する側が有利である」（本書、七七ページを参照）。ヴェ・イ・レーニンは、この著作に表明された思想、「革命においては、たたかわずに敵に陣地を明け渡すことが、たたかって敗北するよりもいっそう多く大衆の士気を沮喪させるような瞬間があるものだ」（レーニン『ロシアにおける党内闘争の歴史的意義』、全集、第一六巻、三五三ページ）という思想を、高く評価した。

著作『ドイツにおける革命と反革命』には、武装蜂起についてのマルクス主義的学説の基礎がおかれている。ここではじめて、「蜂起は、戦争や、その他の技術とまったく

同様に、一つの技術である」（本書、九五ページを参照）という命題が定式化されており、蜂起にあたって革命党が守らなければならないもっとも重要な規則が規定されている。ヴェ・イ・レーニンは、蜂起についてのマルクス主義の学説を発展させるにあたって、これらの規則には、武装蜂起にかんするこれまでのすべての革命の教訓がまとめられている、と指摘した。

エンゲルスは、彼の著作のなかで、ドイツ革命における民族の問題に大きな注意をはらった。彼は、プロレタリア国際主義の原則を堅持して、オーストリアとプロイセンの支配階級がとった民族的抑圧の政策、また、ある民族を他の民族にたいしてけしかけるという政策を、非難している。ポーランド人、ハンガリー人、イタリア人の民族解放運動にたいするドイツ・ブルジョアジーの裏切的な立場を、エンゲルスは断固として非難し、これらの民族に独立を与えよという要求を支持してきたドイツの民主主義派のプロレタリア的翼の首尾一貫した国際主義的な立場を基礎づけている。

この著作のなかで、エンゲルスはまた、当時オーストリア帝国に所属していたスラヴ諸民族（チェコ人、スロヴァキア人、クロアチア人その他）の民族運動の問題にふれている。よく知られているように、一八四八―一八四九年の革命の最初の段階にあたって、チェコ人や、その他のオーストリア国内のスラヴ諸民族の民族運動のうちに強力な革命的民主主義的傾向が現われてきたとき（一八四八年六月のプラハの蜂起、農村における封建的な大衆行動）、マルクスとエンゲルスは、これらの民族の闘争に熱烈な共感をよせた。しかし、チェコ人その他のオーストリア国内のスラヴ人の運動のなかの民主主義的勢力が弾圧されたのち、右翼的なブルジョア的＝地主的分子が優勢を占めるようになったとき、ハプスブルク君主制とロシアのツァーリズムは、ドイツ革命およびハンガリー革命とのたたかいに、これらの民族の民族運動を利用することに成功した。そのため、民族問題をつねに革命の利益の見地から考察していたマルクスとエンゲルスは、これらの民族の民族運動にたいする態度を変更した。マルクスとエンゲルスは、革命の利益、革命の敵にたいする、まず第一に当時のヨーロッパにおける反動の主要な支柱であったツァーリズムにたいする闘争の利益を、他のあらゆるものに優先させた。「マルクスとエンゲルスがチェコ人と南スラヴ人の民族運動に反対したのは、このため、ただこのためであった。」（レーニン『自決にかんする討論の総括』、全集、第二二巻、三二五ページ）

『ドイツにおける革命と反革命』には、エンゲルスの以

前の論文『マジャール人の闘争』および『民主主義的汎スラヴ主義』（本全集、第六巻、一六五―一七六ページ、および二七〇―二八六ページを参照）と同様に、一八四八―一八四九年の具体的な諸条件のもとでのオーストリア国内のスラヴ諸民族の民族運動の客観的役割の正しい評価とともに、また、これらの諸民族の歴史的運命についての若干のまちがった主張がふくまれている。エンゲルスは、これらの民族はすでに自主的な国民的存在をいとなむ能力を失っており、より強力な隣人によって吸収されることがその不可避の運命である、という思想を展開している。エンゲルスがこのような結論に達したおもな理由は、当時彼が小民族の歴史的運命についていだいていた一般的な観念によって説明される。エンゲルスは、資本主義のもとで中央集権化、大国家の創設を基本的な傾向とする歴史的発展の歩みは、イギリスにおけるウェールズ人、スペインにおけるバスク人、フランスにおける低地ブルターニュ人、アメリカ合衆国に占領された地域におけるスペイン系およびフランス系のクリオール人〔白人移民の子孫〕の場合に見られるように、大国民による小民族の吸収にみちびく、と考えていた。資本主義に固有な中央集権化の傾向、大国家の創設の傾向を正しく指摘する一方で、エンゲルスは、もう一つの傾向――民族的抑圧に反対し、独立をめざしてたたかう小民族の闘争、自分自身の国家をつくろうとするこれらの小民族の願望を、考慮にいれなかった。広範な人民大衆が民族解放闘争にひきいれられるにつれて、またこれらの大衆の自覚と組織性がたかまるにつれて、オーストリアのスラヴ諸民族をもふくむ小民族の民族解放運動は、ますます民主主義的、進歩的な性格をおびるようになり、革命闘争の戦線の拡大をもたらした。歴史が証明したところでは、以前オーストリア帝国に所属していたスラヴ系のさまざまな小民族は、自主的な国民として発展する能力、自分自身の国家を創設する能力を示したばかりか、すすんでもっとも先進的な社会制度の創造者の列にくわわったのである。

この巻におさめたマルクスの著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』は、科学的共産主義のもっともすぐれた著作の一つである。歴史的諸事件の分析においても、その理論的概括においても天才的なこの著作は、同時に革命的政論の真の傑作である。W・リープクネヒトのことばをかりれば、マルクスのこの著作には、「タキトゥスの義憤のきびしさと、ユヴェナリウスの寸鉄人を刺す機知と、ダンテの神聖な怒りとが、一つに結びつけられている。」（『カール・マルクスの思い出』、ベルリン、一九五三年、一二二ページ〔邦訳、国民文庫『マルクス回想』六七ページ〕）

『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』は、いわばマルクスの著作『フランスにおける階級闘争、一八四八年から一八五〇年まで』の続篇である。第一の著作の場合と同様に、ここでも、マルクスにとって革命期のフランスの歴史を解明する鍵となったものは、彼の発見した社会発展の法則、唯物史観、階級闘争の理論であった。

マルクスは、唯物弁証法を適用することによって、事件の起こった直後に書かれたこの著作のなかで、一八四八年のフランス革命の主要な諸段階の古典的な分析を与え、第二共和政の時期における階級勢力の配置を跡づけ、一八五一年一二月におこなわれたルイ・ボナパルトの反革命的クーデタの真の原因を深く科学的に解明することができた。エンゲルスは次のように書いている。「生きた今日の歴史をこんなにもみごとに理解し、事件が起こったその瞬間にこんなにもはっきりとその事件の意味を見ぬくということは、じっさい、類例のないことである。」（本書、五六一ページを参照）

フランスの具体的な実例にもとづいて、マルクスは、歴史の推進力としての階級闘争の役割を示している。革命のさまざまな段階におけるそれぞれの政党の立場の大きな変化をあまさず跡づけて、マルクスは、これらの政党の階級的本性を明らかにし、その活動の隠れたばねを明るみにだした。社会生活における政党の役割や、ある階級の政治的および文筆的代表者とその階級の大衆との関係についてのマルクスの深遠な思想は、非常に興味ふかいものである。第二共和政の時期にフランスの政治的舞台に活躍したブルジョア政党や小ブルジョア政党の活動の実例にもとづいて、マルクスは、あれこれの政党のふりまく空文句や幻想と、これらの党の真の本性とを、根本的に区別しなければならないことを示している。そのさいマルクスは、ある階級のイデオローグは実際に自分でもその階級に固有な生活を送っているはずだ、という卑俗な見解に陥らないように、いましめている。つまり、小ブルジョアジーのイデオローグは、必ず小店主でなければならないということはないのである。彼らをこの階級の代表者とするものは、小ブルジョアジーの生活の狭い枠に照応した、彼らの理論的な視野であって、このため、これらのイデオローグは、小ブルジョアジーがその物質的利益に駆られて実践的に到達するのと同一の課題と解決とに、理論的に到達するのである。「これが、一般にある階級の政治的および文筆的代表者と、彼らの代表する階級との関係である。」（本書、一四二ページを参照）

一八五一年一二月二日のクーデタの原因を説明するのに、万事を簒奪（さん）者ルイ・ボナパルトとその徒党の陰謀に帰着さ

せ、こうして意識的、無意識的に簒奪者の個人を大きく見せる観念論的な解釈とは反対に、マルクスは、ボナパルトのクーデタを、それにさきだつ諸事件の経過から生じる不可避の結果と見た。彼は、このクーデタを、共和制の時期に支配的ブルジョアジーが犯した反革命的行為の全系列、人民の民主主義的権利にたいするブルジョアジーのたえまない攻撃、革命的達成物にたいするひっきりなしの侵害の論理的な完成と見た。クーデタは、ブルジョアジーの反革命性の増大の法則的な結果であり、「赤い幽霊」を恐れるあまり、つぎつぎと陣地をボナパルト派の陰謀者どもに明け渡していったブルジョア諸政党の臆病で動揺的な政策の破産の法則的な結果であった。マルクスが指摘しているように、一八世紀末の革命とは反対に、一九世紀中葉のフランスのブルジョア革命は「下向線をえがいて」発展していった。転換が起こるたびに、革命における指導的役割は、つぎつぎといっそう右翼的な政党の手に移っていった。「二月の最後のバリケードがまだとりはらわれず、最初の革命政権がまだ組織されないうちに、もう革命はこうした後退運動にはいっている。」(本書、一三五ページを参照)このマルクスの思想には、ブルジョアジーがすでに反人民的・反革命的な勢力として登場しており、他方プロレタリアートが反革命の攻勢を阻止するにはまだあまりにも弱かった

(XIII)

条件のもとでの、ブルジョア革命の特殊性が表現されている。このような情勢のもとでは、ブルジョア民主主義的秩序のもろさがとくにはっきりと現われ、あらゆる種類の復古主義的な企図のための条件がつくりだされる。

マルクスは、ブルジョア民主主義が制限された、矛盾にみちたものであり、形式だけの、見せかけのうえの民主主義という性格をもっていることを、異常に力強く示している。このことの明瞭な実例となるのは、第二共和政の憲法であって、この憲法のどの条文も、マルクスの適切な規定によれば、「それ自身の反対命題を、すなわち、それ自身の上院と下院をふくんでいる。つまり、一般的な文句には自由を、但し書には自由の廃止をふくんでいる」(本書、一二七ページを参照)のである。

フランスに反革命的なボナパルティズムの政権が樹立された真の原因を明らかにして、マルクスは、ボナパルティズムの本質の深い特徴づけを与えている。諸階級のあいだを巧みに泳ぎまわる政策、国家権力の外見上の独自性、上層搾取者の利益の擁護を陰に隠した、すべての社会層にたいするデマ的な呼びかけ、これがボナパルティズムの特徴である。マルクスは、ボナパルティズムの独裁の形態をとったブルジョアジーのもっとも反革命的な分子の鉄面皮な支配方法を暴露して、ブルジョアジーが、搾取制度を維持す

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

るためとあらば、もっとも凶暴な冒険主義者の手にも権力をゆだね、軍閥の血なまぐさい暴行をも、犯罪者の利用をも、恐喝や、買収や、乱暴なデマゴギーその他の不潔な手段の使用をも、いとわないことを、示している。ボナパルティズム政権のこれらのいとうべき特徴を明らかにするとともに、マルクスは、復活されたボナパルティズム君主制が、深刻な内的矛盾にゆすぶられて、かならず崩壊することを予言している。

この著作で、マルクスは、フランスの農民と、ボナパルト派のクーデタにたいする彼らの態度とに、大きな注意をはらっている。農民のあいだでボナパルト派の扇動が成功をおさめたことを指摘すると同時に、マルクスは、ルイ・ボナパルトの支柱となったのは革命的農民ではなくて、保守的農民であることを、強調している。これらの農民がボナパルトに投票したのは、彼らが政治的におくれており、無知であり、都市の文化生活から切り離されていたためであり、たがいに孤立した、ばらばらな分割地農民経営の存在条件そのものによって生みだされる、彼らの狭い視界のためであった。農民を、たんに徴税の対象としか見なかったブルジョア的な憲法制定議会と立法議会の政策が、農民を革命から反発させ、ルイ・ボナパルトを支持するようにならせたのであった。自分の分割地に愛着していた自作農が、ナポレオン王朝を彼らの伝統的な保護者と見ていたという事情が、これを助長した。マルクスは、農民の二重性を強調して、次のように書いている。「ボナパルト王朝は、農民の開化ではなく迷信を、その判断ではなく偏見を、その未来ではなく過去を……代表する。」（本書、一九九ページを参照）マルクスは、分割地所有の経済的発展を分析して、分割地農民経営の没落がすすみ、高利貸＝資本家によるその隷属化が増大するにつれて、ますます多くの農民大衆が「ナポレオン観念」の腐敗的な影響から解放されるであろう、という結論に到達している。農民の判断、その正しく理解された利益、農民とブルジョアジーの矛盾の増大、すべてこれらは、不可避的に、農民をうながして、労働者階級との行動の統一をうちたてさせずにはおかないのである。マルクスは次のように書いている。「農民は、ブルジョア的秩序をくつがえすことを任務とする都市プロレタリアートを、自分の本来の同盟者かつ指導者と見る。」（本書、二〇二ページを参照）

マルクスのこの結論は、すでに『フランスにおける階級闘争』のなかで彼が定式化した、労働者階級が指導的役割を果たす労働者階級と農民の同盟という思想を発展させたものである。一八四八―一八四九年の革命的戦闘の全経験から引きだされたこのマルクス主義のきわめて重要な命題

を、マルクスは、著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』のなかでいっそう完全に基礎づけている。

マルクスがこの著作でおこなった重要な理論的概括の一つは、ブルジョア革命とプロレタリア革命との根本的な相違についての天才的な思想である。プロレタリア革命は、その壮大な任務の点でブルジョア革命と異っている――プロレタリア革命は、現存制度のはるかに深刻な破壊を、その根本的な改造を、予想する。ブルジョア革命は短命であり、急速にその頂点に達する。プロレタリア革命は、その根本性によってブルジョア革命と区別される。それは、たえず自分自身を批判する。その固有な特徴は、達成されたものにいつも満足せず、自分の誤りを恐れることなく摘発し、訂正することにつとめ、おさえがたい勢いで前方へつきすすむことである。

とくに大きな理論的意義と政治的意義をもっているのは、『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』のなかでマルクスが提出した、ブルジョア国家とプロレタリア革命との関係についての命題である。ここではマルクスは、革命の経験と教訓から彼の引きだした、きわめて重要な一つの結論によって、国家にかんする、プロレタリアートの独裁にかんする彼の学説を豊かにしている。マルクスは、フランス史からとった実例にもとづいて、ブルジョア国家の本質、その特徴、そのさまざまな形態を明らかにしながら、次のような結論に到達している。すべてのブルジョア革命は、すでに絶対君主制の時代に成立した中央集権的な軍事的＝官僚的国家機構をぐらつかせず、かえって、被搾取階級を弾圧するのにますます適当したものに、それを変えてきた。「すべての変革は、この機構を打ち砕かずに、かえってそれをいっそう完全にした」（本書、一九七ページを参照）。プロレタリア革命は、まったく異なった型の権力と国家的中央集権とを必要としており、その本性からして寄生的で搾取者的な、この大衆弾圧の道具をそのまま残しておくことはできない。古い国家機関にたいするプロレタリア革命の任務は、「自分の破壊力をことごとく執行権力に集中し」、それを打ち砕くことにあると、マルクスは考えている。ヴェ・イ・レーニンは次のように書いている。「この注目すべき考察では、マルクス主義は『共産党宣言』にくらべて一大前進をとげている。『宣言』では、国家の問題はまだきわめて抽象的に、もっとも一般的な概念と表現をもちいて提起されている。ところが、ここでは、問題は具体的に提起され、非常に正確で、明確で、実践的にはっきりした結論がくだされている。これまでの革命はみな、国家機関をいっそう完全なものにしたが、いまや国家機関を粉砕し打ち砕かなければならない、と。この結論は、マルクス主義

の国家学説の主要なもの、基本的なものである。」（『国家と革命』、全集、第二五巻、三七八ページ）

マルクスのこのきわめて重要な結論の基礎となったものは、一八四八―一八五一年の革命の歴史的経験であると、ヴェ・イ・レーニンは強調している。「マルクスの学説は、ここでも――いつものように――深遠な哲学的世界観と豊富な歴史的知識によって照らしだされた経験の総括である。」（前掲書、三七九ページ）

マルクスの著作『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』に内容上接続するものに、エンゲルスの論文『昨年一二月にフランスのプロレタリアが比較的に不活発だった真の原因』がある。この論文でも、やはりフランスにボナパルティズム政権が樹立された原因、この政権の本質、それに固有な諸矛盾が、明るみにだされている。エンゲルスは、クーデタの責任をフランスのプロレタリアートに転嫁しようとするブルジョア著作家やジャーナリストの企図に、反撃をくわえている。エンゲルスは、労働者階級が、一八四八年六月に打ち破られ、ブルジョアジーの反革命性のために武装解除されていたこと、したがって、彼らは、ボナパルティズム独裁の樹立を阻止する現実の可能性を失っていたことを指摘すると同時に、プロレタリアートがこの独裁にたいして非和解的な態度をとっていること、民主主義的自由をできるだけすみやかに回復することに彼らが関心をよせていることを、強調している。

この巻にのせたマルクスとエンゲルスの共同著作『亡命者偉人伝』は、筆者たちの存命中には陽の目を見なかったものであって、小ブルジョア民主主義派の指導者たち、まず第一に、ドイツにおけるその代表者たち――キンケル、ルーゲ、ハインツェン、シュトルーヴェ、その他――を批判したパンフットである。このパンフットのなかで、マルクスとエンゲルスは、すでに一八四八年の革命以前に彼らが始めた、さまざまな小ブルジョア的潮流のイデオロギーと戦術の暴露をつづけている。二人がそのさい追求した主要な目的は、プロレタリアートの思想的・戦術的立場の自主性と純潔とを守り、小ブルジョア的幻想と、全体としての小ブルジョア・イデオロギーとの有害な影響からプロレタリアートを保護することにあった。そのうえ、マルクスとエンゲルスのこのパンフレットは、小ブルジョア的指導者たちがプロレタリア的革命家にたいしてくわえていたおびただしい中傷的攻撃にたいする直接の回答となるはずであった。

政治的風刺のあらゆる文学的手法――論敵にたいする仮借ない嘲笑、批判さるべき現象のとくにいとうべき側面を鋭くとりだすこと――をみごとに駆使して書かれたパンフ

レット『亡命者偉人伝』は、ドイツの小市民とその政治的・文筆的代表者たちとの真の欠陥をきびしくえぐりだしている。マルクスとエンゲルスは、真の芸術的表現力をもって、ドイツの小ブルジョア的亡命者の「偉人たち」の肖像を描いて、一つの画廊を構成している。二人は、これらの指導者の俗物的な精神世界の貧しさ、その哲学的・政治的見解の卑俗さと狭さ、政治上での彼らの極度の動揺性、小ブルジョアの特徴である極端から極端への豹変、卑屈なご機嫌とりと迎合から騒がしい無政府主義的えせ革命性への豹変を、鮮やかに示している。マルクスとエンゲルスは、そのパンフレットのなかで、ドイツの小ブルジョア的指導者たちの亡命生活の日常をおおいかくしているカーテンを引き上げて、原則上の争いという仮面のかげでおこなわれている、くだらない喧嘩や口論の胸のわるくなるような情景を描きだしている。二人はまた、あらゆる美辞麗句とおしゃべり、革命についての空文句にたいするデマ的なあてこみ、政治活動を立身出世の舞台、いがみあいと陰謀の舞台に変えるやり方を、仮借なく糾弾している。この亡命者の空騒ぎは、ドイツ諸邦の政府に、ドイツ国内で逮捕や迫害をおこなう好個の口実を与えた。小ブルジョア的指導者たちは、革命の大業をいやしめ、卑俗化したが、これは反革命勢力を利するものであった——これが、パンフレット(XVII)『亡命者偉人伝』から引きだされる主要な結論である。

ドイツで労働運動の多くの活動家が逮捕され、プロイセン政府がケルンで共産主義者の裁判を組織したことに関連して、一八五一年から一八五二年にかけて、何ヵ月ものあいだ、マルクスとエンゲルスおよびその戦友たちは、被告たちに援助を与え、プロイセン政府とプロイセン警察が共産主義者にたいしてもちいた恥しらずなやり方を暴露することに、全力を傾けた。この巻には、ケルンの裁判に関連してマルクスとエンゲルスが新聞に発表したいくつかの声明がのせられている。これらの声明や、エンゲルスの論文『ケルンの共産党裁判』や、とくにマルクスの著作『ケルン共産党裁判の真相』では、この裁判をでっちあげるためにもちいられた警察の挑発、スパイ、偽証、文書偽造のけがらわしい方法が、あますところなく暴露されている。この著作は、今日にいたるまでも、警察や裁判所による革命的階級の代表者の迫害にたいする、進歩的活動家の卑劣な制裁の組織者たちにたいする、巨大な力をもった告発の文書である。ここでは、マルクスは、全世界のまえに、ケルンの被告の弁護者としてだけではなく、さらに告発者として登場している。彼は、裁判の直接の組織者たちのおかした犯罪行為の罪証を示しているだけでなく、警察的＝官僚的国家機構全体、プロイセン国家の腐りきった体制全体を

さらし台にかけている。

マルクスは、プロイセンの司法の傾向性と不公正、ブルジョア「裁判」の階級性を、仮借なくあばきだしている。被告たちに代表されてブルジョア法廷にひきだされているのは、武器をもたない革命的プロレタリアートである。だから、被告たちは、すでにまえもって有罪の判決をうけたにひとしかった。ケルン裁判やその他のさまざまな裁判は、「陪審裁判とは、法律の間隙をブルジョア的良心という幅でうめるために設けられた、特権階級の軍法会議である」（本書、四七〇ページを参照）ということを、明瞭に示した。

マルクスは、この著作のなかで、共産主義者同盟員が陰謀をたくらんでいたかのようにいう偽りの告発を反駁している。彼は、冒険主義的＝陰謀主義的な戦術が、プロレタリア党を組織し、プロレタリアートの階級意識を発展させるという真の任務とあいいれないことを、示している。ヴィリヒ＝シャッパー分派の分裂主義的な組織攪乱活動の実例によって、マルクスは、このような戦術が大衆との分離に導き、労働運動に損失をもたらし、警察の挑発のための好個の基盤をつくりだすことを証明している。政治における冒険主義とセクト主義に対応するものは、唯物論的世界観を主意論および主観的観念論とすりかえ、望ましい空想的な条件を革命闘争の現実の条件ととりちがえることである、とマルクスは指摘している。一八五〇年九月一五日の共産主義者同盟中央委員会の会議で、マルクスは、プロレタリアートによる権力の奪取を目的として、ただちに武装蜂起をおこなうように呼びかけたヴィリヒ＝シャッパー分派の冒険主義的立場に反対して演説し、社会主義革命の準備と、革命そのものとは、長期の過程であって、そのあいだに労働者階級は自己を再教育してゆかなければならない、という思想を展開している。「……われわれは労働者にむかって、諸君は諸関係を変えるためだけでなく、諸君自身を変革し、政治的支配の能力をもつようになるために、なお一五年、二〇年、五〇年間というもの、内乱と民族的闘争とをとおらなければならない、と言う。」（本書、四一二ページを参照）

ケルン裁判と、それに関連したプロレタリア諸組織の破壊とのあとでは、共産主義者同盟の存続は事実上不可能になった。一八五二年一一月に、同盟は、マルクスの提議にもとづいて、その解散を声明した。マルクスとエンゲルスによって創立された共産主義者同盟は、プロレタリア党の萌芽として、プロレタリア革命家の最初の組織として、歴史にのこった。この組織の綱領文書は、不滅の『共産党宣言』であった。同盟の解散後も、マルクスとエンゲルスおよびその戦友たちは、プロレタリアートの隊列を結集し、

科学的共産主義の思想を宣伝するための党活動を、他の諸形態でつづけていった。

この巻では、『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』のためにマルクスが書いた論説が、かなりの場所を占めている。これらの論説のおもなテーマは、イギリスの経済情勢と政治情勢である。イギリスの経済は、マルクスに資本主義的生産様式を研究するための豊富な材料を提供した。マルクスは、すでに『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』のために書いた最初のいくつかの論説のなかで、イギリスの実例にもとづいて資本主義の一連の経済法則の作用を示し、それに固有な矛盾をあばきだしている。マルクスは、資本主義的生産の発展の循環的な性格を指摘し、経済恐慌が避けられないことを証明している。ブルジョア的な俗流経済学者の偽りの楽観論を暴露して、彼は、当時開始していた商工業の活況が一時的なもので、勤労大衆の絶対的および相対的貧困化や失業と極貧状態の増大を阻止する力をもたないことを、強調している。『強制移民――コシュートとマッツィーニ――亡命者問題――イギリスの買収選挙――コブデン氏』という論説では、マルクスは、過剰人口の問題を論じている。マルクスは次のように指摘している。古代にあっては、過剰人口は生産力の発展が不十分なことの結果であったが、資本主義のもとでは、まさに「生産力が増大したために、人口を減らすことが必要になり、過剰分を飢えや移民によって一掃する」(本書、五四四ページを参照)。資本主義のもとにおける生産力の創出と発展の歴史が、これまでのところ、勤労者の殉教の歴史であったことを、マルクスは証明している。この状態を終わらせるためには、勤労者はこの生産力を自分のものとしなければならない。これまでは、勤労者がこの生産力の支配に服してきたのであった。

(XIX)

きわめて興味ふかいのは、「選挙――金融の雲ゆき悪化――サザランド公爵夫人と奴隷制度」という論説である。ここではマルクスは、イギリスにおける資本主義の原始的蓄積の過程の基本的な特殊性の一つを示している。すなわち、大地主が農民人口を仮借なく収奪して、これをその古来住みなれた土地から放逐したことが、それである。「もし、およそ財産についてそれは盗みであるということが言えたとすれば、それは文字どおりイギリスの貴族の財産についてあてはまる。教会領の盗奪、共有地の盗奪、殺人をともなった、封建的・家父長制的財産の私有財産への詐欺的な転化――これらがその所有地にたいするイギリス貴族の権原である」(本書、五〇五ページを参照)。この論説にまとめられたサザランド家の致富の歴史についての資料や、さらに『トリビューン』にマルクスが寄稿した他の一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com